

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの

—『大無量寿経』を読む— ⑤1

本当の依り処

親鸞仏教センター所長 本多弘之

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第126回から128回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々と間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第124回からその一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一）

「愛宝貪重にして、心勞し身苦し。かくのごとくして竟りに至りて恃怙するところなし」（『真宗聖典』69頁、東本願寺出版）。「恃怙」というのは、「恃」も「怙」もたのむという字です。時間的にずっとたのむようなことではないものを、一応、依り処にする、たのみとする。その場合、本当にたのむということになってない。

依り処というと、曇鸞大師が解釈の中で出しているのですけれども、いろんな罪を犯したりしているのを、我々の価値観ではたった一度の念仏ぐらいで消せるはずがないと。罪の深さが感じられれば感じられるほど、念仏を一回称えたら消えるなどそのようなはずがないと思ってしまう。人間の妄念の中で、犯す罪の重さと念仏の重さを比べて、称える念仏の重さではとても犯罪の重さにはかなわないと。こういう人間の考え方は、仏陀の覚りの智慧からすれば妄念でしかないような知恵を根拠に生きてしまっているから起きてくる。独善的に自分が正しいと思って生きてしまっている。そういう秤で計っているのが我々人間の人生の目盛りであると。

如来の大悲が本当に苦悩の衆生を救い取らんがために案じ出した、それが名号という方法である。この名号の方法を受け止めてそれを行わずという場合には、依り処が変わるのだと。妄念の立場を



転じて、如来の大悲の智慧の立場を依り処にすることによって、重みがまったく変わる。こういう譬喩で曇鸞大師は教えておられます。

つまり依り処が変わるということが、価値の転換という意味をもたらすことになるのです。我々は妄念で愛着の心で、重いか軽いか、正しいとか間違っているとかと判断し続けてきているけれど、その延長上で念仏を考えるのは間違いなのだ。念仏の立場は如来大悲の立場だと。これを本当に受け止めるか受け止めないか、依り処に取るか取らないかという問題は、今度は人間の「信」の問題、信ずるといふ問題なのです。それなしに行じたのでは妄念でしかない。そういう意味で、本当の依り処という問題を人間はどこかでしっかりと考えなければならない。

蓮如上人のお書きになった御文に「白骨の御文」と言われるものがありますが、人間の人生ははかない、百年ともたないのだと言われた後で、亡くなってしまうえば白骨になるのだぞと。だから後生の一大事をたのめと、こう言うのです。論理転換が激しいので、我々が拝読していても、どうしてそうなるのかがよく分からない説得の仕方なのですけれども、情念としてはかないのだぞと教えておいて、だから依り処をしっかりと立てなさいと言っているのです。それを「後生の一大事」と言うから、何か後生というのがあるのかなとか、現代の生活からすると何のためにそういうことを教えるのかがよく分からない。でも、あれは本当の依り処をしっかりと、はっきりとさせなさいということを言っているのです。そういうことを思うのです。

本研究会では「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘から問題提起していただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第62回

「ポスト真実」時代の 輿論主義と世論主義

佐藤 卓己氏（京都大学大学院教育学研究科教授）

2019年9月30日に、メディア論を専門とされる佐藤卓己先生（京都大学大学院教育学研究科教授）をお呼びして研究会が開催された。フェイクニュースがあふれているとされる現代はメディア論からはどのように見えるのか、またメディア論とジャーナリズム論の違いは何かなど様々なテーマを提供していただいた。私達の生活と切り離せないメディアを再考することにより、現代を学ぶ研究会となった。以下に、講義の一端を報告する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 田村 晃徳）

■「真実を伝えよ」

現在はフェイクニュースがあふれている「ポスト真実の時代」だと言われます。しかし、これは新しい現象なのでしょうか。ポストの前には「真実の時代」があったということになります。しかし、「真実の時代」のほうが本当はもっと問題ではないかと考えることもできます。なぜならばメディアは真実を伝えるべきだという考え方は、基本的にプロパガンダの発想なのです。ナチスドイツのゲッベルスも、ソビエトのスターリンもメディアには「真実を伝えよ」と要求し続けました。それは当然、彼らの目から見ての真実であり、それ以外は、メディアに載らなかった時代でもあります。

■プロパガンダの代用語

そもそも「マスコミュニケーション」とは、どういう言葉なのでしょう。実はプロパガンダを置き換えるべくアメリカで出来た代用語なのです。プロパガンダはナチスや共産主義者がやっているの、民主主義国家のアメリカでは使えない。我々がやるプロパガンダは「マスコミュニケーション」と呼びましようということで出来た新語です。そうすると、まさに「真実の時代」の息苦しさを、我々は忘れていないかという問題にもなるのです。

■「メディア論」と「ジャーナリズム論」の違い

私は大学でメディア文化論を教えています、



最初にする話は、「ジャーナリズム論とメディア論の違いは何か」についてです。ジャーナリズム論は、多くの大学で行われています。それは現場のジャーナリストや、退職された方が教えていることも多いと思います。しかし、私がこれからお話しするメディア論、あるいはメディア文化論は、ジャーナリズム論とは異なるものです。どのような点が違うか。それはジャーナリズム論は基本的に「真か偽か」「正しいか間違っているか」を問題にします。それに対して、メディア論は、もともとマスコミュニケーション研究を前提に成立したということもあり、「真か偽か」ではなくて、「効果があるかないか」を問題とします。つまり内容の真偽ではなくて、効果の大小を問題にするのがメディア論であると言えばわかりやすいですね。

■情報の影響力

つまり極端な話、嘘であっても影響力のある情報というのは、重要な研究対象となるわけです。それに対して、ジャーナリズム論においてフェイクニュースははじめから退けられることとなります。「真か偽か」を問題にするのですから、そうなります。しかし、メディア論においては、フェイクかトゥルースか、真か偽かというよりも、その情報がどの程度の影響力をもつかに研究の力点があるのだと説明しています。

■あいまいさに耐える

「真か偽か」という判断はAIが最も得意とするところです。しかし逆にAIが一番苦手とするのは、あいまいな情報なのです。そのあいまいな情報を「ポスト真実」という形で退けてしまうのでしょうか。恐らく人間としての私達の生き方が、まさにAI化するような社会をつくることになってしまいます。そのようにならないためにも、如何にあいまいさに耐えるべきかをメディアリテラシーの問題として提起したいと思うのです。

（文責：親鸞仏教センター）